

銚子盃は右の悴共に致し來る

「以上は豫の舊師原勝外先生の手録を境妙院師の手控とに對照整束したる者なり、舊藩時代に於ける當山行事の一斑を知る好資料たるを以て茲に掲録したり」

(二) 日乗上人の書簡

遠境書狀對談之心地不淺候先以其地寺中繁榮貴院中興之由誠以志之至殊勝候□□彌昌榮候様所希候就中妙法寺之儀開基之御靈地候へとも當時之住持心中不□之人什師之御掟違背候條於江戸御奉行所訴訟可申之旨所□□彼處加藤式部外縁□御知行故候則式部之可申上旨候條爾今延引して貴院御志之至故當寺來歴懇望之段難候依而曼陀羅一幅當寺代々之愛名一幅其元代々之變名一幅遣し候表具等可入念候所此便急候故早々□□□

いよ／＼於遠國一寺建立別而於出羽國開山之御時分者顯本寺と申寺有之とも今退轉候處貴院於其元一寺之中興尤於當寺大慶候定テ開基代々御納受可有之候現當二世之盟丁ニ而被彌抽道念寺門之繁昌候様所仰候□□追而其元代々之内二代目日性之性字と貴院之日要之要の字と於當寺代々之法號別而日要是當年來年中上洛有之住持に候條文字相替進之候□

一、當寺行法之次第等別紙進候貴院之志誠誠に神妙之至於愚大幸滿山とも感入候以來誰人雖爲住持貴院は中興之段顯然候重而令談合似合出家有之者可指遣候縱□□其出家共其元之寺務之儀貴院可被執行候様重而可申候事 恐惶謹言

五月廿二日

妙 滿 寺 隱 居

日 乘 花 押

南 部 二 而